

## 連用形とカ（下）

蔦清行

### 四（承前）

前節まででは、カ・ヤ・ソを通じた係助詞全般の、用言連用形に対する接続のあり方について論じてきた。用言連用形は接続法に用いられることがあるが、その連用形接続法に対し、係助詞カ・ヤ・ソは下接することができなかった。それは、連用形接続法が並列の関係を表すことを基本とするものである一方、カ・ヤ・ソは並列と相容れない性質を持つためであると考えられた。これらの係助詞は、並列ではなく、連用修飾の関係を明瞭に示す要素に下接する、と考えられるのである。ここに言う連用修飾関係を示す要素とは、具体的には、「連用形十テ」の接続法や、用言連用形における前項用言、そして形容詞型用言の連用形など

のことである。

さて、いま最後に挙げた形容詞型用言の連用形をめぐって、係助詞の中でもカについては、さらなる接続上の制限を指摘することができた。それは、「カは、形容詞型用言の連用形に下接する例が存在しない」（第一節でBとして指摘した）というものであった。この制限はカに限定されるものであり、ヤ・ソには認められないため、それを引き起こしている原因も、ヤ・ソとは異質な、カ独自の性質なのではないかと思われる。

では、そのカ独自の性質とは、いかなるものであったのだろうか。これについて考えるには、副詞に下接するカに注目することが、手がかりになるように思われる。というのは、形容詞連用形は、かかってゆく用言に対し、連用修

飾の關係を表すことを第一のはたらきとするものであつて、そのような性質は、副詞（本稿では、基本的に、いわゆる状態副詞／程度副詞の意味に用いる）に類似すると考えられるからである。

さて、萬葉集における「副詞十カ」を調査して行くと、一つの看過できない現象に気が付くことになる。

(38) 吾が背子と 二人見ませば 幾許香（いくばくか）

この降る雪の 嬉しからまし（巻八、一六五八）

管見の限り、副詞にカが下接する例は、(38)の例を含め、萬葉集中に全一七例存在しているが、その九割弱に当たる一五例までが、この例の「いくばくか」のように、疑問副詞に下接するものである。

もちろん、カがもともと疑問詞に下接しやすい性質を持つものであることは否定できない。また次に挙げる(39)のように、疑問詞を承ける要素に下接する例も、カの場合の例の一部分を占めている（なお、本稿ではこれ以降、疑問詞に直接下接する場合と、疑問詞を承ける要素に下接する場合とを区別せず、「疑問詞を伴って」用いられる場合として扱う）。

(39) 帰るべく 時はなりけり 都にて 誼手本平（たがたもとをか） 吾が枕かむ（巻三、四三九）

さらに、「疑問副詞十カ」の多く（一五例のうち一一例）が、(40)のような東歌の例であることも、断っておかねばなるまい。疑問詞を伴う例が多数を占めることが、東国方言における特殊事情かとも疑われるからである。

(40) 足柄（あしがら）の 真間の小菅の 菅枕 安是加麻可左武（あぜかまかさむ） 児ろせ手枕（巻十四、三三六九）

しかしそれらを考慮に入れてなお、疑問詞を伴う例がこれほど高い割合に上るといふ事実の背後には、カの場合に關係する特別な事情があると考えるべきではないかと思われる。というのは、疑問詞を伴う例が高い割合を占めるのは、副詞に下接する場合だけでなく、「連用形十テ」の接統法に下接する場合にも、認められることだからである。(41)に例を挙げる。

(41) 月草の 仮なる命に ある人を 何知而（いかにし）りてか 後もあはむといふ（巻十一、二七五六）

具体的な数字で言えば、全一五例の〔連用形＋テ＋カ〕のうち、(41)のように疑問詞を伴うものは、七割以上に当たる一一例を数えるのである。副詞の場合ほどではないが、その他の要素と比較すれば、際立って多いと言って差し支えあるまい。「副詞＋カ」、そして「連用形＋テ＋カ」の場合を除くと、カは萬葉集中に五〇二例存在するのであるが、そのうち疑問詞を伴うものは二〇三例であって、全体の四割程度に留まるからである。

以上の数値上の事実を、表四としてまとめておこう。

表四 「副詞／テ」＋カ」の、疑問詞の有無と用例数

	疑問詞を伴う	疑問詞なし	合計
〔副詞＋カ〕	15 (88.2%)	2 (11.8%)	17
〔テ＋カ〕	11 (73.3%)	4 (26.7%)	15
〔その他＋カ〕	203 (40.4%)	299 (59.6%)	502

〔連用形＋テ〕と副詞とにカが下接する例は、いずれも疑問詞を伴うものが多数を占めることが読み取られよう。そして、カの下接のあり方における両者のこのような類似は、決して偶然と見るべきものではないと思われる。

第二節に述べたように、「連用形＋テ」の接続法においては、先行することながら後続のことからの背景となるよ

うな関係が認められる。そのような関係は連用修飾に近いものであると考えられるが、その連用修飾の関係を表すことこそが、副詞という品詞に託される機能であることは、言うまでもないであろう。つまり、副詞と「連用形＋テ」とは、文法的な性質の上で、類似する一面を持つのである。(42)は、「連用形＋テ」がその連用修飾の関係を表す、典型的な例の一つである。

- (42) 松浦川 川の瀬速み 紅の 母能須蘇奴例弓 (ものす  
そぬれて) 鮎が釣るらむ (巻五、八六一)

このような連用修飾に近い用法は、連用形接続法においても認められるものであるが、テという助詞は、その連用修飾的、あるいは副詞的な関係を、より明示的に表すはたらきを果たす、と解釈すべきものと考えられる。もちろん、「連用形＋テ」が単独で一定のことがらを表すものであるのに対し、副詞はあくまでも一つのことがらの内部でそのことがらを修飾するに留まり、単独では一定のことがらを表し得ないものであるから、両者が全同の性質を持つと言ふことは許されない。しかし少なくとも、ある一つのことからを表す用言を修飾するはたらきを果たすという点で、両者の間に共通性が認められることは、否定できないので

はないだろうか。そしてそのような両者の共通性を考慮するとき、**表四**に見られる接続上の類似もまた、単なる偶然ではなく、特別な理由を持つと考えるのが妥当であろう。両者の文法的な性質の類似が、接続の類似をもたらしているのではないかと思われるのである。

それではなぜ、「連用形十テ」や副詞に力が下接する例は、疑問詞を伴うものが多数を占めるのだろうか。これは、力の持つ意味的な特徴、特にその疑問の性質を考えることによって、説明が可能となるのではないかと思われる。

力は、意味的には対象を不定化する助詞であると考えられるが、そのために、上接する要素を疑問点として標示するはたらきを担うことが多い。このことは、多くの先行研究によって指摘されており、ここで改めて論証する必要はないであろう。次の(43)の例で言えば、

- (43) 白妙の 袖折り返し 戀者香(こふればか) 妹が姿  
の 夢にし見ゆる(卷十二、二九三七)

「(白たへの)袖を折り返して恋うたせいか、あなたの姿が夢に見えます」(口語訳は『新大系』による。傍点は疑問点を示すために引用者が私に施した)のように、力の下

接している部分「恋ふれば」が疑問点として標示されていると考えられる。

そしてこのような性質を別の側面から見ると、力は、疑問点として標示されにくい要素に対しては、下接しにくかったのではないかと思われる。

話を分かりやすくするため、しばらく現代語を例にとつて考えてみたい。たとえば屋内にいるとき、戸外から車がブレーキをかける音が聞こえ、直後に大きな衝撃音が聞こえてきたとする。そのとき私たちは、「車が衝突したのだろうか」という疑問を持つことがある。また「車が激しく衝突したのだろうか」という予想を抱くこともある。しかし、「車が激しく衝突したのだろうか」あるいは「車が衝突したのは激しくだろうか」(いずれも「激しく」が疑問点)という疑いが持たれることは、もちろん可能性としては否定できないが、ふつう、極めて考えにくいであろう。ここでの「激しく」は、車が衝突したという、想定される事態に対し、その衝突がどのようにあつたかを、言語主体が判断した結果の表現である。そのために、「激しく」の部分には疑いの対象となりにくいのである。このような場合に疑問表現が成立するとすれば、それは、「どのように衝突したのか」というような、不定的なものとなるのが自然であろう。ここでは疑問詞が疑問点となっているのであるが、

疑問詞は、それ自体が疑問の意味を持つものであるから、当然のことながら、疑問点となり得るのである。

いま、現代語を例に考えてみたが、古典語においても疑問点となりにくい要素があるであろうことは、想像に難くない。そして、副詞と「連用形十テ」とは、まさしく疑問点となりにくい要素だったのではないかと思われる。「連用形十テ」の例を取り上げて考えてみたい。

- (44) 風に散る 花橋を 袖受<sup>レ</sup>而<sup>レ</sup> (そでにうけて) 君が御跡と 思<sup>レ</sup>鶴<sup>レ</sup>鳴<sup>レ</sup> (しのひつるかも) (巻十、一九六六)

(44)は、「風に散る花橋を袖に受けて、あなたの形見として偲んだことです」のように解釈され、文末のカモによって表される疑問ないし詠嘆の対象は、「風に散る…偲ひつる」の部分、すなわちことがら全体であると考えられる。いささか操作的な手続きとなるが、ここで例えば「…袖に受けてか 君が御跡と偲ひつる」のように、「連用形十テ」の部分に力を下接させた例を想定してみたい。そうするとその例は、「…袖に受けて」を疑問点として、「あなたの形見として偲ぶのは、風に散る花橋を袖に受けてだらうか」のように解釈されるはずである。しかしそのような表現が不自然なものであることは、誰しもが気づくことで

ある。ここでの「連用形十テ」（「袖に受けて」）は、後続することがら（「君が御跡と偲ひつる」）を修飾する要素であり、そのような要素は疑問点とはなりにくいのである。

このように考えてくると、「連用形十テ」に力が下接する例が、疑問詞を伴う場合に大きく偏る、という現象についても、説明が可能となるであろう。

- (45) 天飛ぶや 鴈の翼の 覆<sup>レ</sup>ひ羽の 何處漏<sup>レ</sup>香<sup>レ</sup> (いづくもりてか) 霜の降りけむ (巻十、二二三八)

「空を飛ぶ雁の翼の覆い羽のどこが漏って霜が降ったのだろう」（『新大系』）という大意の歌である。「何處漏香」は、テが仮名で示されていないが、最近の諸注は概ね一致してイヅクモリテカと訓んでおり、「連用形十テ」の例と考えてよいと判断した。さて、この歌には「詠霜」という題詞が付されているが、そのことから考えても、また歌の内容そのものから考えても、霜の降りていることは、疑われない眼前の事実と解すべきであろう。従ってこの文の疑問点は、霜の降りた理由、すなわち、「雁の羽のどこが漏れてだらうか」というところにあると考えざるを得ない。そしてその疑問を表現する「漏りて」の部分は、「連用形

「テ」の形式を取り、霜が降りたことの背景を表しているにもかかわらず、疑問点となっている。それが可能なのは、この「漏りて」の部分が、「いづく」という疑問詞を承けるものであるためと考えるのが最も妥当であろう。疑問詞は、それ自身単独で疑問点を標示するはたらきを担いうると考えられるからである。「連用形十テ」は、ふつう、疑問の対象とはなりにくい要素であると考えられるが、このように疑問詞を承ける場合には疑問点たり得、従って力が下接する例が存在するのである。

なお、副詞についても、「連用形十テ」の場合と全く同様の論法を取ることが可能であろうと思われるから、具体的な説明は省略する。結論を急げば、副詞・「連用形十テ」などの、ことがらの性質・状態や背景を表す連用修飾要素（以下、このような連用修飾を「狭義の連用修飾」と呼ぶこととした）は、疑問詞を伴うのではない場合には疑問点となりにくく、疑問詞を標示するはたらきを担う力は、下接しにくいのだと思われる。そしてその結果、表四にまとめたように、「連用形十テ」と副詞とに力が下接する例は、いずれも疑問詞を伴う場合に大きく偏るのである。

（また以上のように考えると、疑問詞を伴う場合とそれ以外とは、カのはたらきは少し異なるのではないかと思われる。具体的に言うると、疑問詞を伴う場合には、それ以

外の場合に比較して、カ自身の疑問点を標示する役割が表に出てこないと考えねばなるまい。この場合の力はむしろ、疑問点を標示する疑問詞のはたらきを、補強するような役割を担うと解釈すべきではなからうか。

このように見てくれば、第二節末でBとして指摘した現象、すなわち、形容詞型用言の連用形に力が下接する例が見られないという現象についても、副詞や「連用形十テ」の場合と同様の説明が可能であろう。形容詞は、意味の上で、もの・ことの性質や状態を表すという特徴を持っており、従ってそれが連用形で用いられるときには、狭義の連用修飾関係を表すことを第一のはたらきとする。そしてそのために疑問点にはなりにくく、疑問点を標示する力は下接することが許されないのである。形容詞型用言の連用形の場合、副詞や「連用形十テ」の場合とは異なり、疑問詞を伴う例も存在しないのだが、それは、現実的な表現の上で、形容詞型用言の連用形を修飾するような疑問詞が、次の例の「イカバカリ」などごく少数しか存在しないという事情によるものだと思われる。

(46) 行く舟を 振り留<sup>とど</sup>みかね 伊弉婆<sup>いしかばね</sup> 伊弉婆<sup>いしかばね</sup>

故保斯苦阿利家武<sup>こほしくありけむ</sup> 松浦佐用<sup>まつらさよう</sup>  
姫（巻五、八七五）

また、同じく疑問を表す係助詞であっても、ヤが狭義の連用修飾要素に下接しうることは、やはりヤの表す疑問の性質に基づいて説明できる。阪倉篤義氏が述べられるように、カ機能は「文中において、疑ひをふくんだり、または不定であつたりする点を、指示することにあつた」のに対し、「ヤの機能は、それが文中に位置すると、文末に位置するとを問はず、その文の叙述を全体的に強調し(中略)相手にもちかけるといふ氣息を生むものであつた」と考えられる(『文法史について——疑問表現の変遷を一例として——』『国語と国文学』第三七卷第一〇号、一九六〇。『文章と表現』(角川書店、一九七五)所収)。ヤの表す疑問はこのように、文の叙述全体を対象とするという性質を持つと考えられるのである。従つてヤは、疑問点に拘束されることなく、副詞(47の例)や「連用形十テ」(48の例)、形容詞連用形(49の例)など、狭義の連用修飾要素にも、自由に下接することが可能なのである。

- (47) 逢はなくは 日長きものを 天の川 隔又哉(へだててまたや) 吾が恋ひをらむ(巻十、二〇三八)
- (48) ふりにし 姫尔爲而出(おみなにしてや) かくばかり 恋に沈まむ 手童の(と(巻二、一一二九)

- (49) 神さぶる 荒津の崎に 寄する波 麻奈久也伊毛尔(まなくやいもに) 恋ひわたりなむ(巻十五、三六六〇)

(49)を例にとつて言えば、ヤを用いることによつて、「絶え間なく妹に恋い続けることだろ、うか」のように、文全体を問えないし疑いの対象とすることは、自然な態度と言える。しかしカを用い(「間なくか」)、上接する「間なく」を疑問点として標示することは、すなわち「恋い続けるだろ、うか」とは「絶え間なくだろ、うか」のような表現をすることは、少なくとも自然な態度とは認められないと思われる。同様に考えれば、ソの接続についてはもはや多言を要すまい。ソは、上接する要素を、文における強調点として標示するはたらきを担うと考えられる。従つて文中のいかなる要素にも下接してその要素を強調することができるはずである。それゆえ、ソもヤと同様、カよりも自由に、さまざまな要素に下接しうるのである(50は副詞、51は「連用形十テ」、52は形容詞連用形の例である)。

- (50) 玉の浦の 沖つ白玉 ひりへれど 麻多曾於伎都流(またそおきつる) 見る人をなみ(巻十五、三六二八)

(51) 如此為而曾(かくしてぞ) 人の死ぬといふ 藤波の

ただ一日のみ 見し人故に(卷十二、三〇七五)

(52) み吉野の 耳我の山に 時自久曾(ときじくぞ) 雪

は降るといふ 間無くそ 雨は降るといふ(卷一、

二六)

ことからの状態や性質・背景を表す要素、すなわち狭義  
連用修飾要素に対する、ソ・ヤとカとの間の接続上の傾向  
の違いは、以上述べてきたように、カが疑問点を標示する  
はたらきを果たすのに対し、ソ・ヤがそのようなはたらき  
を持つことがない、というところに起因するのではないか  
と思われる。

ただし、副詞・「連用形十テ」ともに、疑問詞を伴わな  
いにもかかわらずカが接続する、例外的な例が存在するとい  
うことは、注意しておきたい(表四に示したとおり、副  
詞は二例、テは四例が存在する)。次に例を挙げておこう。

(53) 日月は 明かしと言へど 吾がためは 照りや給は  
ぬ 人皆可(ひとみなか) 吾のみやしかる わくら

ばに 人とはあるを(卷五、八九二)

(54) かくばかり 雨の降らくに 霍公鳥 卯の花山に 猶

香将鳴(なほがなくらむ) (卷十、一九六三)

(55) 大和には 鳴而歟(なきてかくらむ) 呼兒鳥

象きの中山 呼びそ越ゆなる (卷一、七〇)

(53)は、疑問副詞でない副詞にカが下接する、萬葉集に  
おける全例である。また(55)は、疑問詞を承けない「連用形  
十テ」にカが下接する例であり、こちらはこの例のほか、  
三例が存在している(七八イ・一九五六・三五〇五)。そ  
してこれらの例においてカの下接が認められるのは、いず  
れも理由のある現象であって、決して例外と見るべきもの  
ではないと思われる。

まず、「副詞十カ」のうち、(53)の例を取り上げよう。こ  
の例は、「人皆か」「吾のみや」が並列される、いわゆる  
選択要求の疑問であることに、注目すべきではないかと思  
われる。選択要求の疑問とは、二つの選択肢(ここでは「人  
皆」と「吾のみ」)のうちどちらが真であるかの選択を、  
回答として要求するような疑問表現のことである。それは  
言わば、二つの要素を対比的に並置することによって、疑  
問点をあえて取り立てる特別な疑問表現なのである。この  
ような特別な疑問表現であるために、副詞であっても疑問  
点として表現することができ、従ってカが下接することも  
可能なのである。そうすると(53)については、これまで論

じてきたように、力が疑問点を標示するところから説明が可能なのではないかと思われる。

また(54)の例は、係助詞力が述語用言「鳴くらむ」の直前に現れる、本稿のいわゆる近接型であることに、注目すべきである。というのは、疑問詞を伴わない「連用形十テ+カ」の例も、(55)（大和には鳴きてか来らむ…）をはじめとして、四例全てが近接型を取るものだからである。そうすると、副詞や「連用形十テ」のような、疑問点となりにくい要素であっても、近接型の場合に限っては、力が下接することができるのではないかと思われるのである。

ではなぜ、近接型に限って、このような接続が認められるのだろうか。これは、近接型の意味的な側面について考えて行くことよって、明らかにすることができるのではないかと思われる。

## 五

さて、近接型の意味的な側面について明らかにするには、次の(56)のような、力が用言連続体の前項用言に下接する例を取り上げるのが、近道となるように思われる。

- (56) ながさめて 今夜は寝なむ 明日よりは 戀鳴行武

(こひがもゆかむ) こゆ別なば(巻九、一七二八)

用言連続体における前項用言は、後項用言に対し、連用修飾の関係にあると理解されるが、本節の考え方からすれば、そのような要素は、ふつう、疑問点となりにくいはずであり、疑問詞を伴わない場合、力は下接しにくいはずである。ところが実際には、(56)をはじめとして、力が用言連続体の前項用言に下接する場合は、疑問詞を伴わない例が大多数を占めている。そしてこのような例もまた、力が接続することが可能になっているのは、近接型を取るためなのではないかと思われる。

前節まででは、力の担うはたらきを、上接する要素を疑問点として標示するものと考えてきた。そして少なくともそれを機械的に適用する限り、(56)の例は、「恋ひ」の部分が疑問点となっていると考えざるを得ない。しかし和歌が解釈する立場から考えてみると、「恋しく思いながら行くのだろうか」のような、「恋ひ」だけが疑問点として標示されているとすると解釈は不自然であろう。それよりもむしろ、「恋しく思いながら行くのだろうか」のように、「恋ひ」と「行く」とが連結した全体、あるいは一文全体が、疑問の意味を担っていると解釈するのが自然なのではないかと思われる。もちろん、この例の力(カモ)は、疑問と

いうよりも、それに由来する、いわゆる詠嘆に近い意味を担っていると考えねばならない。しかしその疑問から詠嘆への意味の転換も、疑問の意味の及ぶ範囲が力に上接する部分のみに限定されないためにこそ可能なものであろう。詠嘆の意味は、言うまでもなく、文全体を覆うものだからである。このように、近接型の例においては、疑問の意味の及ぶ範囲が、文末の述語用言や文全体にまで拡大することがあるのである。

もつとも、疑問の意味が文全体を覆う例は、次の(57)のように、近接型でなくとも認められることがある。

(57) 今毛可聞 (いまもかも) 大城の山に 霍公鳥 鳴き響むらむ 吾無けれども (巻八、一四七四)

「今頃は、大城の山にホトトギスが声高く鳴き響かせているだろう。私はいないけれども」(『新大系』)といった大意の歌であるが、この例においては、ホトトギスが鳴いているか否かということが、疑問の対象となっている。従って疑問の意味は、「今も」に限定されず、文末の述語用言「鳴き響むらむ」、ひいては文全体にまで及んでいると考えるべきであらう。近接型でなくとも、確かにこのような例は認められるのである。

一つの文において、文末の用言は、文全体に対する態度を決定する機能を託されると考えられる。従って疑問文における疑問の態度は、文末において最終的に決定されるはずである。力の係り結び文においては、文末にム・ラム・マシなど推量系の助動詞が現れることが多いが、これらの助動詞は、その文末で表現される疑問の態度が、語詞的に顕在化した要素と解釈されるであらう。

しかしそうすると近接型においては、力において表される疑問と、文末において表される疑問文としての態度決定とが、連続して表現されることになる。このために、その二つの疑問表現が、意味的に一体化してしまうのであろう。言い換えれば、文末の用言までを含む一連の意味的連結体(56)の例で言えば「恋ひ(カモ)行かむ」全体が、疑問の意味を担うこととなるのである。

そう考えると、(57)「今もカモ：鳴き響むらむ」のような近接型でない例と、(56)「：恋ひカモ行かむ」のような近接型の例とでは、同じく文末にまで疑問の意味が及ぶとはいっても、その疑問の性質が大きく異なっていると言わねばならない。(57)のような場合、力は、少なくとも外形上文末から分断されているために、一旦は単独で疑問点を標示しなくてはならない。それゆえに、既に論じてきたとおり、疑問点として標示されにくい要素には、力は下接すること

ができないのである。これに対し、(56)のような近接型の場合は、カの前項疑問の意味と、文末において表される疑問の意味とが、一体的に表現される。疑問の意味を担うのは、あくまでも述語用言を含んで一体化したその全体なのである。その結果、カの下接している部分が疑問点であるという意識が、相対的に後退してしまうのである。それゆえ、疑問点となりにくい、用言連続体前項用言のような狭義連用修飾要素であっても、カが下接することが可能であるのではないかと思われる。

ここでは、カが用言連続体の前項用言に下接する場合を例に論じたが、以上のような疑問の意味の一体化が起こる契機は、疑問の意味を担うカと文末とが近接して位置しているところに求められよう。従って、同様の説明は近接型全体にわたって適用できるはずである。

- (58) 一重山 隔れるものを 月夜よみ 門に出で立ち 妹  
可將待(いも)かまつらむ(巻四、七六五)

右の例は、「山一つ隔たっているのに、月夜が美しいと思つて、角に出で立つて妻は私を待っているだろうか」のように解釈される。ここで疑問の意味を担っているのは、

「妻カ待つらむ」全体であると考えられ、決して「妻」だけが疑問点になつている(「私を待っているのは妻だろうか」)のではないはずである。

このように考えてよいとすると、前節で挙げた例外(疑問詞を伴わない(54)の「副詞十カ」、及び(55)の「連用形十カ」)が認められる理由についても、容易に説明できよう。

- (54) かくばかり 雨の降らくに 霍公鳥 卯の花山に な  
ほがなくらむ(巻十、一九六二)  
(55) 大和には 鳴きてか来らむ 呼兒鳥 象の中山 呼び  
そ越ゆるなる(巻一、七〇)

(54)の例は、「こんなに雨が降るのに、ホトトギスは卯の花の咲いている山で、それでもやはり鳴いているだろうか」といった大意のものであるが、ここでもこれまでの近接型の例と同様、「それでもやはり鳴いているだろうか」のように、「なほ」と「鳴くらむ」とが一体化した全体が疑問の意味を担っていると解される。「なほ」の部分のみが疑問点であるとする解釈は、自然なものとは言えないであろう。また(55)の例も、「大和には鳴きながら来るのだろうか、呼子鳥が象の中山を呼び交わしながら飛び越えて行くのが

聞こえる」というように、「鳴きてカ来らむ」全体が疑問の対象となつて見ると見るべきであつて、「鳴きて」だけが疑問点であるとするような解釈は、きわめて成立しにくいように思われる。二つの例のいずれにおいても、近接型を取るために、カの表す疑問の意味と、文末において表される疑問文としての態度の表明とが、一体化していると考えられよう。そしてその結果、疑問点を表すカのはたらきは相対的に後退し、副詞や「連用形十テ」のような、疑問点となりにくい要素に対しても、カの下接する例が認められるのである。

最後に、二点ほど補足しておきたい。

一点め。本節では、近接型を取るときには、疑問点となりにくい要素に対してもカが接続することがある、と主張した。しかし、近接型であればどのような語句であつてもカが下接し得た、というわけでないことは、断っておかねばならない。例えば第一節にBとして示したように、形容詞連用形に対しては、近接型であつても、カが下接することはない。近接型を取らない場合にカが下接し得ない理由は、前節に述べたとおり、形容詞の担う意味が疑問点として標示されるにふさわしくなかった、ということに求められる。しかし近接型の例さえも存在しない理由は、本稿

の範囲では分らない。形容詞の側の問題なのか、それとも近接型の側の問題なのか、不明と言うよりほかないが、引き続き考えることにしたい。

二点め。形容詞型用言以外の用言連用形に係助詞が下接する場合、殆どが近接型を取ることは、第一節に述べたとおりである。ただし、ヤ・ソに関しては、「連用形十係助詞」と述語との間に、「吾ガ」の介入する、近接型のパリエーションと見られる類型が認められる。

(59) 足引きの 山さなかつら もみつまで 妹尔不相<sub>レ</sub>哉

(いもにあはずや) 吾戀<sub>レ</sub>持居(あがこひをらむ) (巻十、二二九六)

(60) めづらしき 人に見せむと 黄葉<sub>わみぢ</sub>を 手折<sub>レ</sub>曾<sub>レ</sub>我<sub>レ</sub>来<sub>レ</sub>師

(たをりそあがこし) 雨の降らくに (巻八、一五八二)

一方カはというと、四〇例存在する「連用形十カ十述語用言」の形の中に、「吾ガ」など他の語の介入する例は一例も存在しなかった(第一節で、表一として示した)。この点でカは、ヤ・ソとは異なる性質を持つと言わなくてはならない。

カとヤ・ソとの間のこのような違いは、本節で述べてきた、カと述語用言との間の、疑問の意味の一体化に関連するものであろう。

カによって表される疑問と述語用言の担う疑問との間に「吾ガ」が介入すると、二つの疑問の意味の一体化が妨げられ、結果的に、カに上接する用言連用形が疑問点として孤立してしまう。しかもこの場合の用言連用形が、用言連続体前項という狭義連用修飾要素であり、従って疑問点として標示されるにふさわしくない要素であることは、本節冒頭に述べた通りである。そうするとカを用いる近接型に對する「吾ガ」の介入は、結果的に、疑問表現として不自然な表現を作り出してしまうことになる。それゆえ、カの場合には、「吾ガ」が介入する例が認められないのではないかと思われる。

これに對して、ヤ・ソはいずれも、カに比べれば自由に、さまざまな連用修飾要素に下接することができる。これらの係助詞は、結びの用言と分断された位置にあっても不自然な表現になることがないのである。だからこそ近接型においても、係助詞と結びの述語用言との間に「吾ガ」が介入することが許されるのではなからうか。本稿では、「吾ガ」が介入する近接型を、近接型のバリエーションと見なしてきたのであるが、それはあくまで近接型に準ずるとい

うに留まるものであって、完全に同一の性質を持つのではないことは、注意しておかねばなるまい。

なお、「連用形十カ」に限定せず、カの係り結び全体にまで視野を広げれば、次のような「吾ガ」の介入する近接型の例が認められる。

- (61) たらちしの母が日見ずて おほほしく 伊豆知武吉  
弓加(いづちむきてか) 阿我和可留良武(あがわか  
るらむ) (卷五、八八七)

同様の例は他に五例(一四〇・二二三・三八・三三五七・三四〇四・三四七四)存在する。しかし注意しておきたいのは、(61)をはじめ、これらの例が全て、カの下接している部分が疑問詞を承けるものだという点である。しかもこの疑問詞は、決して偶然にそこに存在していると見るべきものではない。疑問詞を伴う疑問文では、疑問点がもとより明確であり、従って、「吾ガ」の介入によって疑問点が文末の用言から外形上孤立しても、疑問表現として不自然なものとならないのである。それゆえ、カを用いる近接型の中でも、疑問詞を伴う場合に限って、「吾ガ」の介入が許されるのではなからうか。

「吾ガ」の介入をめぐる以上のような現象は、近接型に

において、カを表す疑問の意味と文末の述語用言の担う疑問の意味とが一体化することの、一つの傍証となるのではな  
いかと思われる。

## 六

本稿では、用言連用形と係助詞カとを主に取り上げ、両者の間の接続のあり方を調査し、いくつかの特徴的な現象を指摘した。その上で、その現象をもたらす原因について考えてきた。問題がいささか多岐にわたったので、最後に要点を簡単にまとめておきたい。

第一節から第三節では、対象をカに限らず、広くヤ・ソまでを含めて調査を行った。その結果、いずれの係助詞も連用形接続法に下接しないこと、そして形容詞型以外の用言の連用形に対しては、用言連続体の前項用言に限って下接することが、明らかにになった。これらの係助詞は、並列関係とは相容れない性質を持ち、そのために、並列関係を表すことを基本とする連用形接続法には、下接する例が存在しないのだと考えられる。連用形接続法は、「連用形＋テ」の接続法に類似する性質を持つと考えられるが、その「連用形＋テ」の接続法に対しては、係助詞が下接する例

が認められる。それは、「連用形＋テ」の接続法が、連用修飾関係に近づく反面、並列関係からは遠ざかる性質を持つためと考えられる。用言連続体の前項用言や、形容詞型用言の連用形に下接する力についても、同様の観点から説明が可能である。

第四節・第五節では、それらの係助詞の中でも、カの場合に焦点を合わせ、形容詞連用形、副詞、「連用形＋テ」の接続法など、狭義の連用修飾要素に対する接続のあり方について検討した。その中で、これらの要素に共通して、疑問詞を伴わない場合、カが下接することがない、あるいは極めて少ない、という現象が観察されることを指摘した。カは、疑問点を標示するはたらきを担うと考えられるが、狭義の連用修飾要素は、意味の上で、疑問点として標示されにくい性質を持つ。連用修飾要素にカが下接する例が、一部の例外を除いて存在しないのは、ここに起因するのである。ただし近接型においては、狭義の連用修飾要素に対しても、カが接続する例が認められる。近接型においては、カを表す疑問の意味と、文末において表される疑問の意味とが、一体化してしまう。その結果、述語用言を含んで一体化したその全体が疑問の意味を担い、カ自身の疑問点を表すはたらきは、相対的に後退する。そのために、疑問点となりにくい狭義連用修飾要素に対しても、カが接続しう

るのである。

もつとも、連用形と力に関して本稿で述べてきたことは、多くの部分が現象の指摘に留まるものであり、それらの現象をもたらししている両者の性格も、大略は、先学によって既に明らかにされているものである。ある面において、本稿がそれらを追認するものに過ぎないことは、ここではつきりと断っておかねばならない。ただ、それら力の性格についてのこれまでの記述は、多くの場合、意味の問題をめぐって行われるものであった。そして意味の問題というのは、目に見えにくく、それゆえに決定的な議論が行いにくいものである。本稿はそれを、接続という現象を通じて、なるべく目に見える形で扱えるようにしようと努めてきた。意味的な問題は、接続のあり方において、現象上に明瞭に顕れていると考えられることを、最後に重ねて強調したい。「種々の連用成分に下接する」と記述されることの多い力の接続であるが、実際には数々の制約が存在し、しかもそれは文法や意味の面と密接に関連するものであると考えられる。それを示すことができたとしたら、本稿に託された目的は、達成されたと言ってよいのであった。

引用に用いた文献は以下の通り（萬葉集からの用例は、読解の便のため、注目部分以外は『萬葉集訳文篇』（佐竹昭広・木下正俊・小島憲之 塙書房、一九七二）を参考に適宜表記を改めた）。

萬葉集 『萬葉集本文篇』（補訂版）佐竹昭広・木下正俊・小島憲之 塙書房、一九九八（旧版は一九六三）

萬葉集の注釈書を示すのに、本文中では以下の略称を用いた。

新日本古典文学大系『萬葉集 一〜四』佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之 岩波書店、一九九九  
（二〇〇三）：『新大系』

付記 本稿の一部は、平成十七年度京都大学国文学会（平成十七年十一月十二日、於京大会館）における口頭発表（「形容詞の接続法」に基づくものである。ただし、論の内容は大幅に改変した。席上、また発表後に、多くの諸賢より貴重なご指摘を頂戴した。記して、篤く感謝申し上げます。

（つた きよゆき・大阪大学日本語日本文化教育センター准教授

